

フエ・阮朝期の皇族の陵墓について

ファン・タイン・ハイ

(翻訳：西村昌也・新江俊彦)

Royal tombs of Nguyen Dynasty in Hue

Phan Thanh Hải

フエでは広南阮氏時代から陵墓が建設され、風水思想を取り入れていたことがわかる。ただし、広南阮氏の陵墓は西山朝時代に徹底的に破壊され、阮朝嘉隆帝時代に再建されている。

そして、阮朝時代に、独特の陵墓を形成するようになる。陵墓造営は選地、描図、納棺地決定、陵内各施設や区域の確定、造営、造営後の山神や土神への祭礼などの過程から成り立っていた。“陵”、“山稜”は皇帝と皇后にのみ用いられており、『欽定大南会典事例』では陵寢の巻があり、詳しく規定されている。

陵墓は二重の壁で方形に取り囲まれ、主体部も方形に統一され、山上に造営されている。阮朝の陵墓は都城の西、西南に集中している。陵墓の平面プランには、直線状に配列するタイプ（明命帝陵、啓定帝陵）、陵墓と寝園を並行に設けたタイプ（嗣徳帝陵、紹治帝陵）、陵墓、寝園、碑林を並行に設けたタイプ（嘉隆帝陵）に分けられる。また、陵墓内における池などの水の要素も重要な位置を占めている。

阮朝の陵墓は、自らの故郷には建設せず、都城近くに建設したことに特徴があり、規模的にもそれ以前のものに比べ大きくなっている。中国の陵墓に比較すると、明の陵墓建築に影響されており、阮朝が清朝を、中国のなかでの異民族的存在と見なしていたことを物語っている。

キーワード：広南阮氏の陵墓、阮朝の陵寢、フエ、風水、儀式・葬礼、明十三陵

はじめに

阮朝皇室の陵墓は、1993年に世界遺産に指定されているフエ（Huế）の建築群のなかの重要な部分を占めている。フエといえば、人々は城池宮殿・廟壇・寺観だけでなく、巨大で伝統芸術的においても頂点に達した陵寢についても思いおこす。

その重要性故に、昔から阮朝の陵寢について関心をもち研究されてきた。しかし、まだ総合的研究と

いうものではなく、当論文では基本的な関心を中心にその問題に挑戦してみようと思う。

主要な依拠する資料は、阮朝により編纂された阮朝内閣の『欽定大南會典事例』、阮朝國史館の『大南一統志』・『大南寔録』・『大南列傳』・『欽定大南會典事例續編』や各陵寢の碑である。その他、フランス人の研究 (*Bulletin des Amis du Vieux Hué*) なども参考にする。

I. 造営の歴史

数千年前の昔より「生寄死帰 (sống gửi, thác về)」という中国の観念が、あの世の家である「墓」の造営に影響してきた。

陵墓 (lăng mộ)・陵寢 (lăng tẩm) という言葉は中国に起源する。中国では非常に長い歴史を持つ故に、秦漢の陵墓、三国時代の陵墓、唐宋時代の陵墓、明清時代の陵墓、というように時代により様々な特徴を持っている¹⁾。

中国文化の影響が多い故に、ベトナムでも陵墓は早く出現しており、Chu Quang Trứの研究によれば、呉権 (Ngô Quyền: 10世紀) は陵墓建設に関心を払っているし、^{タイビン} Thái Bình (旧太平) 省の陳朝の陵は、かなり大規模に建設されている。その後も、皇帝や王・皇后の陵墓の造営には工夫が払われており、特に^{タインホア} Thanh Hóa (旧清化) 省の藍京 (Lam Kinh)²⁾はその最たるものである。もちろん阮朝 (1802-1945年) になって、陵墓は独自の個性を発揮するようになっていく。

広南阮氏³⁾ 時代 (1558-1775年)、特にその後期において、フエの建設はダンジョン (Đàng Trong)⁴⁾ 王国の首都としての性格を帯び、阮主やその妃の陵墓の位置・造営は、かなり完璧に行われるようになった。甲午年 (1774) の裴世達の『甲午年平南図』⁵⁾ 図上の順化地方をつぶさに見れば、その計画性がよくわかる。当時既に富春都城は香江北岸 (今の京城の中) に建設されていた。都城は南面し、商業地区・港市である清河は東側・香江 (フォン川) の下流側にあり、皇朝の壇廟は歴代国主及び妃の陵墓と共に香江上流⁶⁾ (西及び西南方) に配置されていた。即ち広南阮氏時代の順化の都市計画は既に後代の阮朝時代のものかなり近かったのである。もちろん、阮主の陵墓は後の阮朝皇帝のそれの及ぶものではない。また残念なのは、阮主の陵墓はほとんどが西山朝時代に破壊され、阮朝時代に再造営されたため、具体的様相がわからない場合が多い。しかし我々の阮主陵墓調査は、その時代にすでに風水思想を陵墓建設に用いていることを明らかにしている。

阮朝時代創始後、嘉隆 (Gia Long) 帝 (1802-1820年) は、阮主時代の富春 (Phủ Xuân) と同じような

1) 秦の始皇帝陵は非常に規模が大きく、三国時代の陵墓は地上部を造営していない。唐代の陵墓は山自体から陵墓を造成しており、明清時代の陵は建築や風景により注意を払ったものとなっておる。(参考 楊道明, 《中華建築陵墓該論》中國建築工業出版社, 北京, 1988)。

2) Nguyễn Tiến Cảnh, Trần Lâm Biền, Chu Quang Trứ 編著 1992年 *Mỹ thuật Huế*, Viện Mỹ thuật-Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế, Huế.

3) ベトナムでは阮主時代と呼ぶ。

4) 中南部ベトナムの伝統呼称。

5) 『洪徳版図』のなかに納められた中部から南部ベトナムに到る絵地図集。

6) フオン川上流に、端公墓 (阮潢), 端君墓 (阮福源) が表されている。

規格でより大規模にフエを建設した。西山朝により破壊された、阮主やその妃の陵墓を再造営した後⁷⁾、嘉隆帝は祖先が選んだ地に自分たちの「永遠の家」として天授陵（Thiên Thọ lăng）を1814年から造営を開始し、1820年に終えた。この陵墓地域は、その後発展し、7つの陵墓が造営され⁸⁾、面積は2,875haに及ぶことになる。この地域はフエ都城から南西16km 離れ香茶県の定門村に属しており、陵墓の中では都城から最も離れている。その後各阮朝皇帝は、フォン川沿いに、より都城に近い所で建設している。嘉隆帝は、フエの都城建設を行い、かつ阮朝陵墓の基本的規定を決めたと言えよう。当然、こうした基本的規定や帝制は、明命帝が正式に制定し、後に補足されているものだが。

1840年、明命（Minh Mạng）帝の孝陵（Hiếu Lăng）は、14年間の吉地を捜した結果、川の合流点 Bang Lăng のそばにある錦雞（Cầm Kê）山が選ばれ1840年に起工されたが、造営が始まってすぐに帝は崩御してしまった。紹治帝が造営を継続し、1843年にほぼ完成し、のちに補足造営が行われている。総面積は500haである。

紹治（Thiệu Trị）帝は1847年に崩御し、嗣徳帝が帝位を継承し、香水県の居正社に吉地を選び、昌陵（Xuong lăng）を造営した。造営は1848年にほぼ完了し、のちに補足造営が行われている。紹治帝陵は、既に造営され、1841-1843年に修築された、生母の胡氏華（Hồ Thị Hoa）の陵墓、孝東陵（Hiếu Đông lăng）を含めて、475haの規模を持つ。

嗣徳（Tự Đức）帝の謙陵（Khiêm Lăng）は、都城から7km離れた陽春村に万年吉地の地を選び、1864-1867年にかけて謙宮の造営を行い、自身の終生の住みかとした。謙宮は1867年から1883年にかけて離宮のような存在で、帝は崩御後、そこで埋葬され、謙陵と改名された。1884年、さらに謙陵の中に、嗣徳帝の養子であるがわずか4ヶ月しか在位しなかった建福（Kiến Phúc）帝の陪陵（Bồi Lăng）が、造営され、1902年には、嗣徳帝の正室である麗天英（Lệ Thiên Anh）、つまり皇后の武氏縁を埋葬するために謙壽陵（Khiêm Thọ Lăng）を加えて造営している。

育徳（Dục Đức）帝の安陵（An Lăng）を、成泰（Thành Thái）帝（育徳帝の子）が1890年に御屏（Ngư Bình）山のふもとに造営し、その後1899年に修築している。当陵墓は最も簡素に造営されたものであり、面積はわずかに3445m²しかない。その後、謙壽陵には1954年に成泰帝を埋葬し、1987年には維新（Duy Tân）帝を改葬して、埋葬している。謙壽陵は3人の皇帝（系譜としても祖父-父-子と連なる）を葬っているのみならず、皇帝の家族も多く埋葬されている。当陵墓は都城から南へ3kmの所にある。

同慶（Đồng Khánh）帝の思陵（Tư Lăng）は、もともと父である堅泰王（阮福洪該：Nguyen Phúc Hồng Cai）が寝殿としていたものを凝禧殿と改名して父を祀っていたが、帝の崩御後、それを追思殿として1889年から造営がなされた。啓定帝時代（1916-1925年）、特に1916-1917年に、朝廷は新しい建設資材で、修築している。嗣徳帝陵の横に位置している。

7) 1808年、阮朝は広南阮氏時代の歴代国主及び主妃の陵墓群17陵を再建した。1812年には、瑞聖陵と永延陵を造営し、明命、紹治帝期には陵墓の修築を1840-41年に行っている。『欽定大南會典事例』工部216巻。

8) 陵墓群は以下の7基の陵墓を含む。光興陵（宋氏堆：阮福瀨の第2妃の陵、1680年頃造営）、永茂陵（阮福濤の皇后である、孝義皇后宋氏領の陵、1696年造営）、長豊陵（阮福澍の陵、1738年造営）、瑞聖陵（孝康皇后、つまり嘉隆帝の実母、1812年造営）、皇姑陵（嘉隆帝の実姉、太長公主隆成の陵、1825年頃造営）、天授陵（嘉隆帝と皇后の陵、1814年初頭造営し、1820年増築）、天授右陵（順天高皇后、嘉隆帝の第2妃の陵、1847年造営）。

啓定 (Khải Định) 帝の應陵 (Ứng Lăng) は Châu Ê の区域に位置し、帝自身が選地し、1920年より起工の指示を行ったものである。帝が1925年に崩御後も造営は続けられ、1931年に完成している。これが阮朝最後の陵墓で、なおかつ最も長い時間を造営に費やしたものとなっている。

広南阮氏の陵墓の造営工程は明らかになっていないが、阮朝時代については、以下のように明らかにできる。

《選地》——この工程は非常に重要なもので、非常に工夫がなされて場所が選ばれている。阮朝は萬年吉地 (Vạn niên cát địa) と呼び、風水師や風水に長けた大臣官僚がこの作業に参加している。嘉隆帝陵墓の場合、黎貴惇 (Lê Quý Đôn) の息子である黎維清 (Lê Duy Thanh) が選地を行い、明命帝の場合、黎文徳 (Lê Văn Đức) が14年かけて探し出している。その選地の過程は、各陵墓の聖徳神功碑に書き記されている。選地後、皇帝自身が視察し、最終決定を下し、目的にかなうように山や土地の名を改名している⁹⁾。

《陵地の地局図製図・玄宮や各区域の確定》——この工程のほとんどは皇帝自身と工部が行う。ただし、紹治帝・育徳帝・同慶帝の場合は突然崩御しているなのでこの限りではない。

《造営》——準備や造営資材の運搬段階も含んでいる。造営資材は木・竹・磚・石・瓦・陶磁器などで、主として河川経由で陵地に運ばれている。造営に際しては国家が良質な資材や優秀な職人を動員している。タインホア産の石・鉢場 (Bát Trảng)¹⁰⁾ の磚・清化省や芸安省の鉄木などである。啓定帝の時は、ヨーロッパから陶磁器や瓦などを輸入している。

起工時の祭礼は、造営時期をはかって決められ、通常寝殿 (寝所かつ祭礼を行う所) を共に建設し、皇帝が崩御した後、玄宮が建設され、埋葬され、碑閣・石人・石像・石馬などが建設される。もちろん、皇帝が不測に崩御した場合は、朝廷が玄宮を先に造営し、その他の部分を後に造営している。

《山神・土神への感謝儀礼》——陵墓はそれぞれ、山神の廟をもち、それらは陵寝の維持の任を負っている。

一般的に陵墓建設は非常に長い時間をかけて行われている。例：嘉隆陵 (1814-1820年)、明命陵 (1840-1843年)、嗣徳帝陵 (1864-1867年)、啓定帝陵 (1920-1931年)。そして、その後何度も修陵が行われている。

II. 陵寝や建設資材の規式

II-1. 名称

陵墓の名称は、阮朝の時に限って、規制が厳格であった。皇帝や皇后の陵墓にのみ、陵 (lăng) や山陵 (son lăng) と呼ばれ、親王・妃・嬪は寝 (tâm) と呼ばれ¹¹⁾、臣民のものは貧富に関係なく墓 (mộ) と

9) 例えば、嘉隆帝の陵墓を造営した定門山は、天授山に改名され、明命帝陵は、錦雞山を孝山に、嗣徳帝陵は、居政山を順道山に、紹治帝の昌陵は、楊春山を謙山に改名している。

10) ハノイ郊外の有名な窯場。

11) 広南阮氏 (阮主) の王と妃嬪の陵墓は、共に“陵”と尊称されているが、それは阮朝が皇帝、皇后として追尊したためである。また、唯一皇帝、皇后ではなく、『大南一統志』の山陵に挙げられている例に、香茶縣安舊社の“慧靜

呼ばれる。『大南一統志』には、阮朝各皇帝や各皇后の陵墓は「山陵」のところに入れられている。『欽定大南會典事例』は、1巻を陵寢（216巻）にあて、規制・禁令・造営・寢園や植木の規則などを決めている。嗣徳帝から以後にかけては、『欽定大南會典事例續編』で園寢・生墳・親王や官僚の墓などについて補遺を行っている。

陵墓の名に関しては、現在我々は嘉隆陵、明命陵と呼んでいるが、実際は、『大南一統志』（維新9年版）には30陵の陵墓名を記している¹²⁾。

広南阮氏時代の陵墓は、頭文字が、各阮主に対しては“長”を、各妃には“永”で始めている。しかし阮朝各皇帝の場合、そのような規則性はないし、阮主の陵墓名自体、嘉隆7（1808）年に命名されたものである¹³⁾。

阮朝の陵墓の命名法は明時代の影響をうけていると思われる。嘉隆帝は自身の“永遠の家”に、“天授”という名を選び、その山にも同じ名をつけているが、明の十三陵が位置する山名と同じである。明の場合、太祖（朱元璋）の陵名は孝陵であり、その陵墓は安徽省の南京の南に位置し、残りの十三陵は、長陵を最初にして全て北京郊外の“十三陵”にまとまっている。我々の推測では、嘉隆帝は天授山の周辺全域を阮朝の陵寢域とする意図をもっていたが、後の皇帝達が実現しなかったと考える。

阮朝は、天授陵に続いて、考陵、昌陵、謙陵、培陵、思陵、應陵と命名を行っている。天授陵以前の広南阮氏の陵墓名も合わせれば、明命帝以降、単字名となり、それ以前は合字名であったことになる。さらに、嘉隆帝の場合、順天皇后の陵は、天授陵の右手（西側）に位置して天授右陵と呼び、明命帝の孝陵の場合、皇后の陵は左手（東側のかなり離れたところ）に位置して孝東陵と呼んでいる。この変化の法則は清朝の陵墓規則と同じである。

また、命名の時期については、広南阮氏の王や后は、嘉隆帝の時代に追尊されているが、阮朝の皇帝、皇后の殆どは陵墓の造営後、朝臣が合議を行い、皇帝が選名して号名を贈っている。もちろん、嗣徳帝の謙宮から謙陵に変えた例外はある。

II-2. 規模・構造そして建設資材

阮朝は、陵墓の規模はかなり具体的に決めている。基本的に、1. 阮主と妃の陵¹⁴⁾、2. 阮朝皇帝とその皇后の陵、3. その他の皇室の人（皇子・公主・親王・親公・妃嬪・嬪余）の寢についてである。

II-2-1

阮主の陵墓は、阮朝時代に再造営したもので、それぞれ構造はよく似ている。陵墓はフォン川沿いの都城の西あるいは西南に位置している。それぞれ、長方形の2重の囲壁があり、石と磚片で建設され、

聖母元帥山古墳¹⁵⁾がある。ただし、この被葬者も、もともとは公主である。

12) 『大南一統志』において、広南阮氏の各陵墓について記す場合、阮朝が追尊した廟号（阮潢の場合、太祖嘉祐皇帝）で呼称している。『大南會典事例』禮部96巻もほぼ、同様に記している。

13) 應陵は、同書にはまだ挙出されていない。

14) 陵墓は、阮朝により再造営されたもので、広南阮氏時代に、陵墓の規模や構造に関してどのような規定があったかは不明である。

前面と後面に磚と石による屏風があり、前面の屏風は独立しているが、後面の屏風は内側の囲壁にはめこまれている。中央の墳墓は「寶封 (Báo phong)」と呼ばれ長方形で2-3の段がめぐらされ、寶封の前には磚か石による香案がある。こうした陵墓には木造建築はなく、後の阮朝陵墓に比べ小さく簡単なつくりとなっている。

長基陵：太祖嘉裕皇帝、つまり阮潢 (Nguyen Hoang：生没年1525-1613年) の陵墓は、香茶縣羅溪社¹⁵⁾ (現在のHương Trà 県Hương Thọ 社La Khê村) に位置している。もともとは広治省 (現^{クアンチ} Quảng Trị) 省の武昌縣石捍山に位置していたが、嘉隆帝時代に移設されたものである。Tả Trach 川の左岸に位置し、川岸から300mの所に位置し、フエ都城から西南へ10kmのところにある。陵墓は正北方向に面し、2重の長方形の囲壁を持つ。外壁は玄武岩でつくられ、最上部は方形磚で作ってある。周囲長は36丈9尺2寸¹⁶⁾ (実際は156.5m：以下、括弧内は著者らの実測値) とされ、壁高は6尺3寸 (260cm) である。内壁は、完全に方形磚で造られ、16丈4尺2寸 (69.5m)、壁高は5尺 (205cm) である。墓主体部は、方形磚と漆喰で造られている。その地上部分は平坦な長方形で、2段構造になっている。上層部は172cm幅×248cm長×25cm高、下層部は222cm幅×303cm長×30cm高である。その前には90cm高×110cm幅×214cm長で、脚部が鬼面の香案が設置されている。また、内壁と外壁の入り口の間に屏風を建て、前面に陶磁器片で龍文を装飾している。墓の主体部の後ろにも龍文をあしらった屏風を建てている。



フエにおける広南阮氏と阮朝の陵墓分布図



長泰陵

長衍 (Trường Diễn) 陵：熙宗孝文皇帝、つまり阮福源 (Nguyen Phúc Nguyên：1563-1635年) の陵墓で、香茶縣海葛社の山 (現Hương Trà 県Hương Thọ 社Hải Cát村) に位置する。最初は廣田縣に位置していた。フオン川の左岸に位置し、川岸から約350m、フエ都城からは西南方向へ6km離れている。陵墓は南面している。陵墓は2重の囲壁をもち、長基陵と同じような構造になっている。ただし、内壁は

15) 陵墓の位置や規模の数値については『大南會典事例』工部216巻より引用。

16) 阮朝期の1898年以前は、1丈は4.24m、1尺は0.424mで、1898年以降、新規定により、それぞれ4m、0.4mとなった。

最上部も含めて玄武岩製である。外壁は周囲長28丈4尺2寸（120.5m）、壁高は6尺3寸（250cm）、内壁は、周囲長15丈7尺6寸（120.5m）、壁高は5尺（202cm）である。墓の主体部は2段構造で、上層部は210cm×322cm長×17cm高で、下層部は259cm幅×372cm長×23cmである。墓の前に香案が設置され、屏風には現在文様が残っていない。

長延陵（Trường Diên）陵：神宗孝昭皇帝、つまり阮福瀾（Nguyen Phúc Lan：1601-1648年）の陵墓で、承天府安憑社の山（現在 Hương Trà 県 Hương Thọ 社 KimNgọc 村）に位置する。陵墓は Tả Trạch 川の左岸に位置し、川岸からは2km、フエ都城から西南方向へ11km離れている。陵墓は北面し、その構造は上述の陵墓とよく類似する。外壁の周囲長は29丈3尺4寸（124.5m）、壁高は6尺3寸（251cm）で、内壁の周囲長は16丈1尺（68.3m）、壁高5尺（198cm）である。墓の主体部は、上部構造が170cm幅×214cm長×27cm高、下部構造が187cm幅×310cm長×23cm高である。

長興陵は、太宗孝哲皇帝、つまり阮福瀨（Nguyen Phúc Tần：1620-1687年）の陵墓で、一般には“Chín Châu の墓”と呼ばれている。陵墓は、承天府海葛社の山（現 Hương Trà 県 Hương Thọ 社 Hải Cát 村）に位置し、フオン川左岸から800m離れ、フエ市中心からは7km離れている。陵墓は東北方向に面し、阮福族により1996年に重修されたばかりである。重修時には、太宗孝哲長興陵と題字を刻字した石碑が立てられ、背面には王の小史と公状についてベトナム語で記してある。墓は2段構造で、上出例に類似していたが、重修の際に、もう一段大きな段が加築されてしまった。最上段は193cm幅×271cm長×22cm高で、中段部は、241cm長×326cm長×18cm高、最下段が345cm幅×433cm長×7cm高、2重の囲壁は、上述例によく類似し、外壁は、周囲長が25丈9尺6寸（210m）、壁高が6尺3寸（2.57m）で、内壁は、周囲長が12丈4尺3寸（52.8m）で、壁高が5尺（1.97m）である。陵の前面には、小さな拝庭があり、10個の植木鉢が据えられている。この植木鉢は、以前9個しか無く、故に一般に“Chín Châu（9つの鉢）”の墓と呼ばれていた。また、拝庭に上がるための7段の階段も附されているが、これは最近改修された。

長茂陵は、英宗孝義皇帝、つまり阮福溱（Nguyen Phúc Thái：1650-1691年）の陵墓で、承天府香茶縣金玉社の山（現 Hương Trà 県 Hương Thọ 社 Kim Ngọc 村）にあり、Tả Trạch 川の左岸に位置している。川岸からは1.5km離れ、フエ市中心からは、西南方向へ11km離れている。陵墓は山の上に位置し、北方向に面している。主体部は、上述例同様、2段構造で、上部が、275cm幅×350cm長×23cm高、534cm幅×650cm長×18cm高である。墓の前には香案があり、囲壁の門を抜けると、龍馬¹⁷⁾をあしらった屏風がある。陵の囲壁は、外壁の周囲長が28丈7尺2寸（121.7m）、壁高が6尺3寸（2.5m）、内壁の周囲長が15丈8尺6寸（67m）、壁高が5尺（1.98m）である。

長清陵は、顯宗孝明皇帝、つまり阮福澗（Nguyen Phúc Chu：1675-1725年）の陵墓で、香茶縣金玉社の山（現 Hương Trà 県 Hương Thọ 社 Kim Ngọc 村）にあり、Tả Trạch 川の左岸に位置している。川岸からは0.8km離れ、フエ市中心からは、西南方向へ10.5km離れている。陵墓は山の上に位置し、東南方向に面し、前面は水田である。墓主体部は、2段構造で、上部が136cm幅×212cm長×22cm高で、下部が193cm幅×258cm長×27cm高である。囲壁は二重構造で、外壁が、周囲長28丈4尺2寸（120.5m）

17) 8尺以上の背丈の高い馬のこと。

で、壁高が5尺(1.96m)、内壁が、周囲長は16丈6尺(70.3m)で、壁高は5尺(2.05m)である。屏風と香案は、ほぼもとの状態のまま残っている。

長豊陵は、肅宗孝寧皇帝、つまり阮福澍(Nguyen Phúc Chú: 1697-1738年)の陵墓で、香茶縣定門社の山(現Hương Trà県Hương Thọ社Đình Môn村)にあり、Tả Trạch川の左岸に位置している。川岸からは2km離れ、フエ市中心からは、南方向へ12km離れている。陵墓は正北方向に面している。墓の主体部は2段構造で、上部は、145cm幅×251cm長×20cm高、下部は210cm幅×271cm長×18cm高である。主体部の前には屏風があり、前面には龍馬、後面には龍があしらわれており、ほぼもとの状態で残っている。囲壁は、外壁が周囲長28丈2尺(121m)で、壁高が6尺3寸(2.53m)、内壁が、周囲長15丈3尺2寸(66.5m)、壁高5尺(2.02m)である。

長泰陵、世宗孝武皇帝、つまり阮福闊(Nguyen Phúc Khoát: 1714-1765年)は、香茶縣羅溪社の山(現Hương Trà県Hương Thọ社La Khê村)にあり、Tả Trạch川の左岸に位置している。川岸からは0.5km離れ、フエ市中心からは、南方向へ10.5km離れている。陵墓は山の上に位置し、正北方向に面し、前面は水田である。墓の主体部は2段構造で、上段が250cm幅×325cm長×28cm高、下段が510cm幅×610cm長×20cm高である。主体部の前の屏風は、前面が龍馬で、後面に龍があしらわれている。囲壁は、外壁が周囲長29丈9尺2寸(126m)、壁高6尺3寸(2.53m)で、内壁が14丈4尺2寸(61.2m)、壁高が5尺(1.45m)である。

長紹陵は、睿宗孝定皇帝、つまり阮福淳(Nguyen Phúc Thuần: 1765-1777年)の陵墓で、香茶縣羅溪社(現Hương Trà県Hương Thọ社La Khê村)にあるが、最初は、嘉定¹⁸⁾の平陽縣に位置していたものを、嘉隆8年に移設している。陵墓は、Tả Trạch川の左岸に位置し、川岸からは0.4km離れ、フエ市中心からは、長基陵に非常に近い。陵は西北方向に面している。囲壁は、外壁が周囲長29丈6尺6(117.2m)、壁高が6尺3寸(2.51m)、内壁が周囲長15丈2寸(64.4m)、壁高5尺(1.9m)である。墓の主体部は2段構造で、上段が190cm幅×233cm長×28cm高、下段が250cm幅×305cm長×35cm高である。

基聖陵は、興祖孝康皇帝、つまり嘉隆帝の実父である阮福淪(Nguyen Phúc Luân)の陵墓で、香水縣居正社の興業山にあり、フオン川岸に近い。この陵墓は1790年に西山朝により掘り返して荒らされ、嘉隆時代の初期に再造営された。基本構造は、前出陵墓例と同じであるが、前面に非常に大きな屏風があり、その後ろにバッチャン産の磚を敷いた3段の拝庭がある。葆城は1重の方形で、規模が23.6m×18.7m×3.15mである。寶封(訳者注:墓の主体部の地上部構築物)は、直方体形で、3段構造である。上段は196cm幅×220cm長×34cm高、中段は250cm幅×286cm長×28cm高、下段は310cm幅×345cm長×12cm高である。葆城の前面と後面には、生き生きとした龍と麒麟が装飾された屏風がある。以前は、陵墓の東西両脇に、それぞれ3間の間取りをもつ更衣殿と神庫が立っていた。

認識

どの陵墓も以下のように風水の原理を体現している。つまり、陵墓は高い丘の上に位置し、背後に山

18) 現ホーチミン市とその周辺。

を控え、前に湖池あるいは溪流か水田をもち聚水 (tụ thủy) している。陵の明堂は広大で見通しがよく、自然の山が屏風となっている。両側には“帝位の手 (tay ngai)”である左龍右虎 (Tả Long, Hữu Hổ) の山が控えている。

都城から相対的に離れており、阮主達が墳墓に対して大変な投資をしたことを示している。陵墓の方向は様々で、阮朝の陵墓や陵墓建築が南面を基本とするのと異なっており、これは阮朝の風水研究においても興味深い。

II-2-2. 阮朝皇帝と皇后の陵墓

阮朝143年間において、13人の皇帝がいたが、実際は7陵に10人の皇帝と若干数の皇后が埋葬されたのみである¹⁹⁾。また歴史的条件が異なり、規模や風格も異なっている。

II-2-2-1. 嘉隆帝陵

嘉隆帝陵 (天授陵) は、嘉隆帝・2人の皇后・4人の皇族、の7つの陵墓からなり、面積は2,875haに及ぶ。そして、嘉隆帝と2人の皇后と太后のみ、皇帝陵の基準に沿って、寝廟をもつ形で造営されている。

嘉隆帝と承天高皇后陵の天授陵は中心に位置し、3つの区域、つまり寝殿、陵墓、碑林で構成され、3つの低い山 (真ん中が正中山、左側が青山、右側が白山) に位置し、その前に月湖という湖がある。さらに半月型の山があり、さらに大天授山が連なり、周囲36の山全てに名前がつけられている。陵墓域の中心域は、左面、右面、後面は広さ100丈 (424m)、前面は150丈 (636m) ある。皇帝と皇后の陵墓は塼による三重の囲壁 (葆城) があり、内壁は30m長、24m幅、4.16m高、外壁は31m幅、70m長、3.56m高、1m厚ある。寶封は、2つの石製の家形に造られており、“乾坤協徳”のように両屋が連なったつくりになっている。寶封の前には石製の香案があり、前後に屏風がある。入り口の扉は銅製で、入り口の前には7段の塼敷きの前庭が造られ、神道 (通道) はタインホア産の石製磚で敷き詰められている。塼敷きの前庭の最下段には10人の文武官、2頭の象、2匹の馬の石像 (石像生) が配置されている。



工部製作の嘉隆帝陵図



嘉隆陵

19) 皇后の陵墓が、嘉隆帝陵区の天授右陵、孝東陵 (孝陵)、昌壽陵 (昌陵)、謙壽陵 (謙陵)、思明陵 (同慶陵) のように独立して造営されている場合がある。



嘉隆帝陵の寶頂

碑林は左手の青山に位置し、方帝の平面形をした2層の屋根をもつ楼型式の建築で高台に位置している。建築の広さは8.75m×8.8mで、四方を塼壁で囲み、一方にのみ入り口が設けられている。碑林の面積は30m×42mで、周囲に低い囲壁がある。碑亭は、明命帝が編纂した、嘉隆帝に関する小史と功德について記した碑文“聖徳神功”を記した碑を保護するように建てられている。石碑は2.96m高、1m幅、0.32cm厚、碑石を据える台は1.95m長、1.55m幅である。石碑と台石は共にタインホア産の石でできており、精緻な文様が彫刻されている。碑面の頂部は龍の横面を文様として入れ、その口が“壽”字を啜えた形になっている。上方と下方の手と両側の縁飾りは龍雲文様となっている。上方の縁飾りは、真ん中に太陽が配され、両側が巻き雲文様となっている。下方の縁飾りは水波紋である。以前は、碑面の刻字は全て金箔が貼られていた。また近くに“后土之神”を祀った小さい石碑（1.2m高強）が2段積みみの台に立てられている。

右手の白山に位置する寝域は、長方形の囲壁（102m長×19m幅×2.5m高）をもち、前面に儀門（*nghi môn*）があり、左右に従院、真ん中に明成（*Minh thành*）殿がある構造になっている。明成殿は5間2廈（ひさし）の建物で、17.6×19.6mの基壇の上に立つ。殿中には嘉隆と承天高皇后の龍位（*long vị*）を祀っている。

天授右陵は、天授陵の右手に位置し、順山の上に位置する。陵墓は陵と寝の2域に分かれ、50m離れている。陵には2重の囲壁があり、外壁は130mの周囲長、2.9m高、内壁は82mの周囲長、2.3m高である。寶封は石造で、前面の屏風と香案も石製である。寝域には嘉成殿があり、順天皇后を祀る二棟を合わせた造りであったが、現在は崩壊している。

端聖陵は、もっとも簡単なつくりで、陵域と寝域の2つの区域からなり、阮朝最初の皇太后の陵墓である。前面にはほぼ方形をした池（88×77m）があり、寶封はタインホア産の石造りで、2重の囲壁がある。内壁は89mの周囲長で、3.4m高あり、外壁は138mの周囲長で、3.6m高である。外壁の門はアーチ状の造りで、その前後にレンガで実芯を造った屏風がある。寝殿は、108m長、63m幅、3.7m高の囲壁に囲まれている。正殿はもともと明清殿と同じで、二棟の合わせ作りで、25×19.5mの基壇の上に建てられていた。前後に左右の従院と左右の従寺があるが、全て崩壊してしまっている。

II-2-2-2. 明命帝陵

明命帝陵（孝陵）は、皇后や自身の家族を陪葬していない唯一の陵墓である。

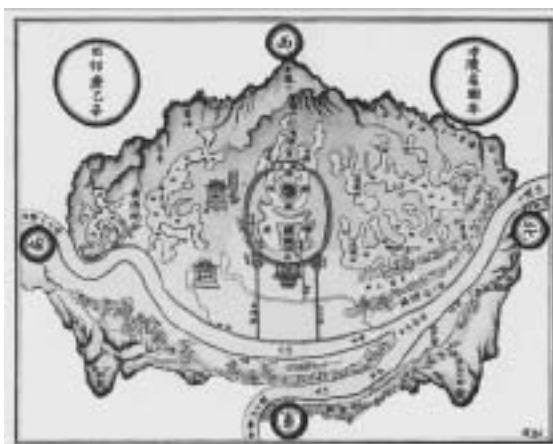
総面積は500haに及び、陵区は15haになり、2,000m長3.6m高の石造りの囲壁をもつ。陵は、孝山を背にし、更に背後に金風山 (Kim Phung: フエで最も高く、475m) を控えている。前面にはフオン川があり、西北-東南 (乾-巽) の方向に、「一」の字状に各構造物が配列されている。陵は、中心軸・左右の両軸からなっている。

中心軸となる神道は、外側の屏風、塼造りで三関型式に建てた大紅門、バッチャン産の塼を敷き詰めた前庭 (42×44.8mと二列に並べた石像群: 象, 馬, 文官, 武官からなる)。

前庭部の最も奥に、銅製の麒麟が立っている。石碑を配した碑亭は、2段の基壇 (20m長×20m幅×9m高強) 上に建てられている。碑亭は、方亭式建物で、10m×10mの規模で、3m以上の高さの聖徳神功碑が、1.09m高×2.33m幅×1.65m長の石製基壇の上に立てられている。その後ろに、3段になった拝庭 (44.8m×45m) がある。寝域は囲壁により完全に囲まれ、四方に門がある。正門の顯徳門は、三関式の木造門で、上部に楼閣が造られている。その後ろに崇恩殿があり、これは二棟を合わせた造りで、基壇は23,45m×22,05mの規模で、中に明命帝と皇后を祀ってある。前面の両側東陪殿と西陪殿を配し、後方の両側に左右従院を配している。塼造りのアーチ式の弘澤門をくぐると、3つの橋 (真ん中: 中道橋, 左: 左輔橋, 右: 右弼橋) があり、明樓に続いている。これは3段に盛り土で造成された丘 (三才山) の上に建てられており、さらに通明正直橋で新月湖を渡り、葆城に至る。葆城は、周囲長273m、高さが3.5mの囲壁で、円形の自然の小山を囲んだものとなっており、表面は松を植えている。その下には、地下に造営された玄宮がある²⁰⁾。神道の全長は700mを超える。



空からみた明命帝陵



工部製作の明命帝陵図



明命帝陵平面図

20) 『大南会典事例』は、“玄宮は、昔の人の規定によって、地下に造られる”と記録し、この規定は、隧道と呼ぶ、山の地下部へ続く通道をもち、地下に塼や石で郭室を築き、棺を中に納める明清時代の陵墓と同じと思われる。

神道の軸を中心にして、左側に対称関係にあるのが、左紅門を入り口として、澄明湖に沿ってまばらに建てられた追思齋、關蘭所、靈芳閣、左從房、迎涼館などの幾つかの建築群である。そして右側に対称関係にあるのが右紅門、虚懷榭、神庫、右從房、馴鹿軒、釣魚亭と連なる建築群である。現在この左右軸の建築は、ほとんど基壇しか残っていない。

II-2-2-3. 紹治帝陵

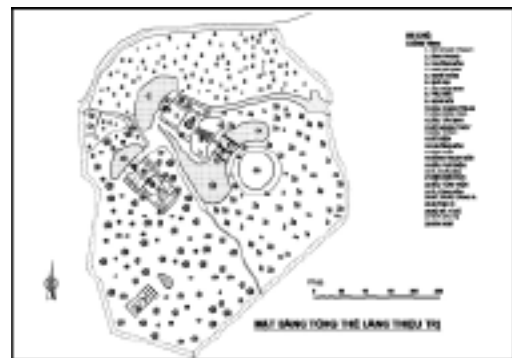
当陵は、昌陵・孝東陵・昌壽陵を含み、さらに紹治帝の家族の寝や墓も含まれている。皇帝の昌陵は、寝廟（左側）と陵墓（右側）からなり、平行に並んでいる。両者は低い山を背後に控え、前面の西北方向には囲壁がなく水田がある。昌陵自身の総面積は6haあり、建築形式などは明命帝の孝陵によく似るがより簡素になっている。

寝域の始まりは塼造りの屏風で、その次が半月型の湖（2400㎡）、そして、錦石²¹⁾製の坊門をくぐって、バッチャン製の塼を敷きつめ、中央の通道にはタインホア産の板石を敷いた3段式の拝庭に到る。寝殿は、方形の囲壁に囲まれ、四方に門をもつ。前面は鴻澤門で、明命帝の顯徳門と似ている。門をくぐると表徳殿があり、その基壇は23.4m×21.5mの規模を持ち、明命帝の崇恩殿のように二棟を合わせた造りである。両側の前後に左右宇と左右從院を配す。後方の門は塼によるアーチ式である。

陵墓域の中心軸は、半月形の潤澤湖（3300㎡）を始まりとし、塼造りの屏風、銅製の儀門、バッチャン製の塼を敷き、両側に石像生²²⁾（象、馬、文官、武官）を配した前庭、碑亭（基壇部は2.65m高で、構造は明命帝陵と類似し、中に嗣徳帝が纂文した聖徳神功碑が立っている）が続く。そして、徳馨樓があり、やや軸線をずらして顯光閣が並ぶ。徳馨樓の建築は、明命帝陵の明樓と類似していたが、現在は基礎（18.5×18.5m）しか残っていない。徳馨樓の両側には標柱が立っている。そして半月形の凝翠池（7600㎡）が、円形の葆城を囲むように配されている。葆城へは、正中橋、東和橋、西定橋の3つの橋が続き、葆城は塼造りで、門は銅製であり、明命帝陵の葆城に類似する。



紹治帝陵（昌陵）



紹治帝陵平面図

昌壽陵は、慈裕太后（嗣徳帝の生母）の陵墓で、寝殿域の西側に位置し、その構造はかなり簡易であ

21) 大理石。

22) 陵墓の通道や拝庭に配される石像のこと。翁仲とも呼ばれる。

る。前面に半月湖があり、続いて三段の拝庭、方形二重の囲壁（外壁が89.4m周囲長、3.6m高、内壁が60.5m周囲長で、2.65m高である）の中に嘉隆帝陵のような石造の寶封となっている。

孝東陵は、紹治帝の生母である太后、胡氏華の陵墓で、フオン川近くの昌陵の前に位置している。陵墓は陵外域、陵内域、寢殿域からなる。陵外域は、フオン川脇の船着き場（Bến ngư）、御路（3m幅で陵に続く）、塼造りの15m高の花表柱2本、当直の衛兵のための建物で、5間の間を持つ公所台（現在は残らず）がある。陵内域は、半月湖（2000㎡以上）、バッチャン製の塼敷きによる3段の拝庭、そして陵内域となる葆城に到る。葆城は2重の囲壁をもち、外壁は26m長、20.7m幅、3m高で、内壁は16m長、13.8m幅、2.6m高である。寶封（4m長×3.12m幅×1.3m）は、タイホア産の板石で造られ、天授陵のものによく似る。前面に香案が置かれ、寶封の前後に屏風が建てられている。また付属の陵墓として、故皇女の陵、早殤や諸公の陵墓がある。こうした陵寢は皇帝の子供で、夭逝したもの達の墓である。

II-2-2-4. 嗣徳帝陵

総面積は500ha近くあり、陵墓のみで15haあり、そこに謙陵・謙壽陵（Khiêm Thọ Lăng）と陪陵がある。これらの陵区は全て、嗣徳帝による設計であり、完成後、1867年から1883年にかけて、当陵は離宮となり、その後寢園となった。

謙陵は、嗣徳帝が設計した昌陵の意匠を引き継ぎ、陵域と寢域の2軸に分かれた構成となっている。ただし、寢域は左手に、陵域は右手に配されている。また、流謙湖の前面を囲むように、建築や園庭をめぐらせており、陵墓の全景は、昌陵に比べより柔和で、疎らな感じになっている。この2つの軸以外に、謙壽陵と陪陵が後に加えられているが、これは当初の建築設計には無かったものなので、陵墓の全景に影響している。

陵墓の羅城は塼と山石で造られ、1500m長、2.5m高の規模があり、3つの門（務謙門、尚謙門、自謙門）が設けられている。陵墓の前面は主に流謙湖が占め、左手から水を導入し、陵域と寢域の両方を抱くように配されている。湖の真ん中には謙島があり、その上に3屋の小亭（雅謙亭、樂謙亭、標謙亭）が建てられている。湖岸には水榭²³⁾が二棟（愈謙榭、沖謙榭）と3基の塼造りの橋（循謙橋、踐謙橋、由謙橋）が兩岸と島を渡る木橋を結ぶように建てられている。寢域の軸線域は離宮の中心域を構成するもので、平面方形の建物が2棟（恭謙と公謙）あり、3間造りで鼓樓をもつ謙宮門がその正門となっている。門をくぐると、両側に禮謙廡と法謙廡の廡があり、正殿の和謙殿は二棟を連結した建築形式で、嗣徳帝と皇后の位牌を祀ってある。和謙殿の後には良謙殿があり、もともとは皇帝が起居する寢宮であったが、後に慈裕太后（嗣徳帝の母）を祀る所となった。その両側には衣装を保管する溫謙堂と皇帝のための歌舞場である鳴謙堂があり、その後方には從謙院と用謙院がある。さらに後方には益謙閣と庭園が続く。また、寢域の右軸には、横長の家が多く並んで、小房を構成する広大な区域があり、帝が謙宮に訪れたときに従う妃嬪のためのものである。

その前には、嗣徳帝の宮妃を祀る至謙堂と両脇に依謙院と持謙院が配されている。

23) 地面と水面を跨いで建設された建物。

陵域の軸線は、寝域の軸線に比べ、やや後方に引っ込んでおり、これは造営時期が遅かったためである。最前面は、漆喰製の2列の石像生を両側に並べた拝庭になっており、その後ろには、嗣徳帝が纂文した謙宮記を刻文した巨大な石碑を建立した碑亭がある。石碑は4m高、2.15m幅で、石碑の基台は1m高、3.08m長、1.6m幅である。その後ろには、小謙池という半月湖があり、さらには2重の囲壁をもつ葆城に続く。葆城の中には、タインホア産の板石で造った寶封があり、嘉隆帝陵のそれによく類似する。寶封は2.96m長、1.58m幅、2.47m高である。

謙陵は玄宮に関して、明確な規定を行った稀な例である。1883年に批准された奏文は、この陵墓の研究に関して以下のような重要な情報を教えてくれる。

“玄宮の造営は起工した。第1層は木槨製で、第2層は石槨製で、第3層と底面は、それぞれ5枚の板石で覆われている。さらに内側の周囲に2枚重ねの板石をめぐらし、外側に磚（1尺5寸長）をめぐらしている。その上に1座ずつの石造の家と机を建て、前面には隧道をつくり、龍車を入れることができる。そして、城壁をめぐらし、内側の前後に屏風を建て、樓門、脇門を建て、扉は銅製とし、龍をあしらった銅柱を建てた。必要な物資量は、2000枚以上のタインホア産とクアンナム（広南）産の板石、40万個以上の磚、7000枚以上の瓦、20000斤以上の石灰、480000斤の茶、700斤以上の松ヤニ、1000斤以上の鉛、30000斤以上の糖蜜、3000斤以上の鉄、200斤以上の破れた網、各種薬約20-30斤である。兵を1200人以上、石工を200名、大工を150名、烏船と梨船をそれぞれ15艘出して、1年2ヶ月で完了する。”²⁴⁾

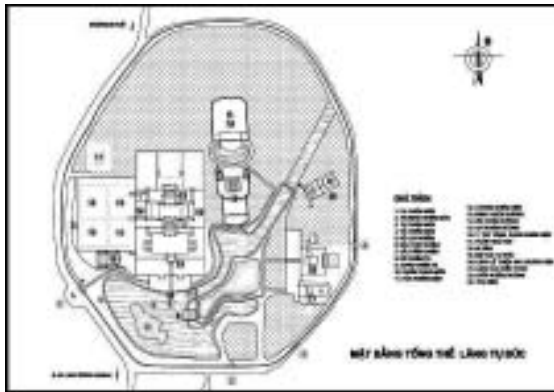
謙壽陵は、かなり規模が小さく、陵域の左側に位置し、流謙湖の対面に位置する。陵域は5段の拝庭（うち4段は磚敷き）と、葆城と寶封を持つのみである。拝庭には、祭礼時の黄屋を建てるための基壇と柱穴がある。葆城は2重で、前後に屏風がある。葆城の外壁は31.5m×21.3mで、内壁は19m×14.55mである。前面の屏風は陶磁器片で非常にきれいに装飾されており、寶封はタインホア産の石製で、嗣徳帝のそれとほぼ同じで、2.96m長、1.58m幅、2.5m高である。

陪陵は、建福帝が4ヶ月在位して崩御した後、1884年に造営された。帝は、嗣徳帝の養子3人のうちの1人で²⁵⁾、しかもベトナムが非常に大変な時代²⁶⁾であったこともあり、朝廷は、父の陵墓の中に陪葬することに決定し、その名も陪陵としている。陵は謙壽陵が位置する、流謙湖の左岸に位置する。陵墓は、祭祀を行う執謙齋（その後、執謙殿に改名）を建てた右側の寝域と、左側の陵域からなる。執謙殿は、連結式の建物であるが、簡素で、基壇は16.3m×10.8mである。右手には回廊、副屋があり、後方には、遺謙樓の基礎が残っている。この建物はもともとは、2階建てで、36の柱をもち、基壇は、16.3×16.3mの規模で、1.56mの高さであったが、陪陵造営時に、解体されている。陵域には、3段の拝庭があり、2重の囲壁（葆城）がある。外壁は14.7m×16.9mの規模で、2.4m高である。内壁は10.2m×8.2mの規模で、1.8m高である。寶封は非常に低く造られており、2.7m長、1.4m幅、0.37m高の規模である。下部構造の玄宮は、その規格が明確に記録されている。

24) 『大南会典事例続編』工部・45巻・16b。

25) 嗣徳帝は、阮福膺禛（瑞太王の子）、阮福膺登と阮福膺棠（堅太王の子）を養子とし、後に、育徳帝、建福帝、同慶帝として即位している。

26) 1883年嗣徳帝が崩御し、その後、育徳帝、協和帝、建福帝の相次ぐ廃位や殺害が続き、フランスはフエを占領、フエ条約による保護国化を進め、翌年にはフランスは北部を占領し、第2次フエ条約を結んでいる。



嗣德帝陵平面図



空からみた嗣德帝陵

II-2-2-5. 育徳帝陵

最もフエ都城に近い陵墓で、約6haあり、育徳帝の安陵（An Lăng）と、慈明（Tư Minh）皇后・成泰（Thành Thái）帝・維新（Duy Tân）帝など4つの帝系に属する皇族が合葬されている²⁷⁾。育徳帝は、わずか3日しか帝位におらず、年号も建号されなかった。廢帝され痛ましい死に方をしたので、最初は簡単に埋葬されたのみであった。成泰帝（育徳帝の子）が即位してから、陵が建設され、陵名も与えられた。

安陵も、陵域（右）と寝域（左）からなり、並行に配され、西北方向に面している。寝殿は囲壁で囲まれ、6245㎡（73.6m×57.1m）の面積があり、4つの門を有す。塼造りの三閩門をくぐると、屏風、扨庭、隆恩殿と続く。隆恩殿は、5間造りの家を連結させたもので、基壇は22.2m×20.2mの規模をもつ。殿中には、育徳帝と皇后の位牌が祀られ、後に成泰帝、維新帝が加祀されている。殿の後方には左右の従院がある。

陵域は、3重の囲壁があり、3445㎡（67.5m×51m）の面積をもち、3つの門を前面に、側面に1つずつの門を有す。前面の中央門は三閩型式で、三階建ての塼造りである。その両側の門はアーチ式である。門をくぐると、1368㎡の面積があり、内壁を通り抜けると、そこが葆城（36.8m×14.5m）である。葆城の中には、木造で方形（7m四方）の黄屋があり、屋根は黄色瑠璃瓦で覆われている。黄屋の両側は寶封で、天授陵のように乾坤協徳式に2基の墓を連結させたつくりで、5層の石を積み上げた直方体の形をしている。

安陵には、碑亭と石像生がないのも特徴である。

成泰帝と維新帝の陵は、ともに安陵の東側に位置し、後代に造成されたものなので、簡素な造りで、



育徳帝陵

27) 当陵墓域には、阮氏定（成泰帝の側室で、維新帝の母）、阮嘉氏英（成泰帝の正室）、胡氏芳（成泰帝の側室）の陵墓があり、枚氏鎮（維新帝の側室）の墓穴を造営し、遺骨の改葬を行った。その他、42の皇族や公主の陵墓、育徳帝の家系に属す121の墓がある。



成泰帝陵



維新帝陵

一般人のものと変わらない。

II-2-2-6. 同慶帝陵

嗣徳帝陵に接する、500haほどの面積をもつ大型の陵寢である。中には、同慶帝の思陵（Tu Lăng）、堅太（Kiên Thái）王の天成局（Thiên Thành Cục）、各皇族の寝墓が建設時期を違えて配されている²⁸。陵は廟殿と陵墓の2区からなっている。

寢域は丘に位置し、東南に面し、3 km離れた天安山を前案（風水の前案後坐の概念）としている。寢域は全体が、方形の囲壁（3 m高、0.55m幅262m周囲長）で囲われており、それぞれ4面に門が1カ所ずつ開いている。正門以外の門は、アーチ式で、屋根は瓦など模した造りとなっている。正門は、宮門と呼ばれ、木製で3間の間取りをもち、2階立てである。宮門を抜けると石敷きの15段の階段があり、両側には龍をあしらってある。さらに3段の階段を下りると、凝禧殿の前庭部に出る。

凝禧殿は、寢域の正殿であり、重檐疊屋式に3棟の建物（建物それぞれは、7間2廈〔ひさし〕の間取りで、金箔を貼った100本の鉄木柱を有す）を連結させて、1つの基壇（ほぼ方形で25m×24m）の上に建てたものである。正殿には、同慶帝の位牌以外に、左右に聖恭皇后と先宮皇后の位牌が祀られている。

凝禧殿の前には、左手に公儀堂、右手に明恩院があり、共に3間2廈式の構造で、功臣の位牌を祀っている。殿の後方には、左右の従院があり、同じく3間2廈式のつくりで、帝が崩御した後に、宮妃達が生活した場所であった。

陵域も、高い丘の上に位置し、東南東方向に面し、天苔（Thiên Thai）山を前案としている。陵墓の構

28) 元々、同慶帝陵には帝の生父である堅太王（咸宜帝、建福帝の生父でもある）の寝墓があった。即位後、同慶帝は堅太王寝墓から東南に百メートルほど離れたところに追思殿を建設し、父を祀ろうとした。しかし、完成前に同慶帝が病気で崩御した（1889年1月28日）。次の成泰帝は追思殿をもって同慶帝を祀ることを決定し、名前を凝喜殿と改めた。堅太王の位牌は安旧江の川岸にある欣栄祠堂に移された。同慶帝の陵墓は凝喜殿から西南に百メートルほど離れたところに、極めて簡素に造営された。1916年8月、同慶帝の子である啓定帝が現代的な建設資材を用いて同慶帝陵を重修した。凝喜殿区域は1921年及び1923年にも重修されている。このように、同慶帝陵は断続的に約35年にわたり整備されたものである。この陵墓の複雑な造営過程はこの陵墓区の各建築に色濃く反映されている。

造は先帝達のものによく類似するが、建築資材に、セメントと鋼鉄を使っているのが違いである。寶封は方形磚で囲まれた3重の囲壁で囲まれている。外壁は、25m×25mの規模で、1.6m高、0.5m厚、中壁は0.5m高で、0.7m厚、内壁は3.4m高で、0.6m厚である。全て、前面に門が設けられており、外壁の外には虎符と“寿”字をあしらった屏風がある。寶封は、タインホア産の石製で、4.2m長×2.6m長の家屋形になっており、棟先の下には龍文とコウモリ、そして“寿”字が施されている。

陵の前は、3段の拝庭で、25.7mの幅があり、上段部は10mの長さで、格子目状に磚が敷かれ、中段部は7m長、下段部は5.2m長で、全てバッチャン製の磚敷きである。さらに前面は、磚造りの平面方形の碑亭で、屋根は丸瓦葺きを模した形をしている。中にはタインホア産の石で聖徳神功碑を立て、石碑は3m高、1.45m幅、0.16m厚、基台は0.6m高、0.8m幅、2.8m長である。啓定帝が王を讃えて1916年に書いた碑文が刻まれている。石碑の両側にはセメントと漆喰でつくった表柱2本がある。

全体的に、思陵もこれまでの阮朝皇帝陵とよく似た形式であるが、3棟の建物を連結させた凝禧殿に施された装飾芸術は、19世紀末から20世紀初頭の職人による、非常に豊かで独特のものである。建築史の面においても、思陵は現代建築の影響を受け始めており、伝統建築との間における、葛藤と融合の歴史の幕開けを示している。

II-2-2-7. 啓定帝陵

應陵との名称をもち、阮朝の陵寢として最後に造営されたものである。陵は、Châu Chũ 山麓に造営され、西南を向いている。周囲は松林に囲まれている。その中で啓定陵は、ヨーロッパ中世の巨大な楼台のように鎮座している。陵の建設区域は、長方形（117×48.5m）で3m高の柵が囲っている。寢殿と陵墓は一直線状に並び、それらは127段の階段をもつ7つの平面区の上に配されている。最下段部には通道があり、37段の階段を上ると正殿に到る。階段部は、3本の通路からなり、両側は上から這い下りてきた姿勢の龍像があしらわれている。正門をくぐると第2の前庭に到り、方形（47m×40.5m）で、格子目状に磚敷きされており、両側には、左右の従寺が立てられ、青い家と呼ばれている。両方とも3間の間取りで、壁建ちで、方形板瓦を葺いた屋根の建築である。中には各功臣の位牌が祀られている。さらに、29段の階段を上ると、47m×40.5mの拝庭に到る。巨大な三関形式の儀門はが前面にあり、両側には2列ずつの文官、武官、兵士、馬、象などの石像が配されている。碑亭は拝庭の最後部真ん中に、セメント建築で立てられ、屋根は、スレート製の瓦で葺かれている。中には、タインホア産の石による石碑が、鬼面をあしらった脚台の上に立てられている。碑文には啓定帝の功德を記した文が刻まれ、石碑は3.1m高、1.2m高あり、脚台は0.76m高、0.85m幅、2.1m長である。石碑と脚台共に、フエの伝統的文様が刻まれている。

拝庭の次が、方形で3段構造のテラスで、格子目状に磚敷きされている。各段は13段の階段をそれぞれ間に挟んでおり、上から下に這った形の龍4頭ずつそれぞれ階段部にあしらわれている。テラスには、各種の植木を植えた、方形花壇があり、また、第2段目のテラスには、正月などに旗を掲げるコンクリート製の現代的旗竿がある。

天定宮は、第7段目のテラス、つまり神道の終わりに位置し、陵墓の最高位置にある。宮は、祀りを行う寢殿であり、遺骸を安置する場でもある。天定宮は、方形の平面形（34.5m×26.4m）で、錦石（大



空からみた啓定帝陵



啓定帝陵平面図

理石)を床に敷き詰めている。間取りは5つの部屋に別れ、両脇が、左右直房とされ、壁は大理石の色に塗られている。真ん中の3つの部屋は、“三”の字状に配されており、最前の部屋は、コンクリート製の祭壇(案)が設置され、上には啓成殿という殿名を記した扁額が掲げられている。部屋の四方は、陶磁器片を使って“八寶”，“四時”，“五福”のテーマで、詩文と共に精緻に装飾されている。天井は豪華な“九龍隠雲”の絵で飾られている。真ん中の部屋には、実身長の1.7倍にした啓定帝の金メッキした銅像が、金の玉座(1920年フランスで鑄造)の上に腰掛けている。銅像の上にはコンクリート製の寶傘があり、背後には沈みかけている太陽が配されている。銅像の9m下には、帝の遺骸が安置されている。最後方の部屋には前の2部屋より1.7m高い基壇が造られ、啓定帝の位牌と祭壇や皇帝の各私品が置かれている。

啓定陵の最も価値あるところは、陶磁器などを使って、天定宮の内部を豪華に飾り付けた装飾絵であろうが、全体をみると、陵墓全体で東西の建築様式の融和に成功し、ベトナム建築史のなかでも特別の位置を占めている。

若干の認識

阮朝の各陵寢は、都城の西、西南のフォン川沿いに位置し、それぞれ離れた関係になっている場合が多い。総面積は巨大であるが、陵墓を含むそれぞれの建築群は大きいものではなく、自然とよく調和している。

皇帝と皇后の陵墓の平面構造は主に3種類に分けられる。

1. 直線状配置型(例：孝陵や應陵)。
2. 陵と寢が並行関係になる型(例：天授右陵・昌陵・謙陵・安陵・思陵)。
3. 陵・寢・碑閣が3つ並行に並ぶ型(例：天授陵)。

しかし、こうした3つの型は、最初の陵墓である天授陵に起源を發し、それぞれに改変したものである。

各陵寢において、水域の位置は、應陵を除いて山の次に重要な位置を占めている。各陵寢において、孝陵の證明湖、昌陵の殿湖や潤澤湖・凝翠湖、謙陵の流謙湖や留謙池のように、水域は大きな面積を占め、故に各陵は柔らかで南方色豊かなものになっている。又、木花も大きな役割を果たし、各陵墓の周囲は天然の森に囲まれており、自然との調和のとれた建築群として意図されている。

各陵墓の建築資材も時代の性質をよく表しており、最初は木・磚・瓦・石（石は現場のものを利用しているものが多い）を利用しているが、後になって、セメント・板型瓦（ardoise）・陶磁器など輸入した資材を用いている（思陵・應陵）。

II-2-3. その他の皇族達の園寝について

4類に分けることができる。1. 親王や親公の園寝，2. 成人した皇子・公主の園寝，3. 妃嬪の園寝²⁹⁾，4. 山墳早塲の場合³⁰⁾。

明命19（1838）年、阮朝は妃嬪・宮嬪・婕余の園寝についての規定を決定し、嗣徳16（1863）年には、それら以外の対象となる人々についての園寝について決定した。

“親王，郡王，親公は，妃嬪の園寝の例則と同じとし，内壁は4尺1寸高，1尺4寸厚，2丈7尺長，2丈7尺幅，外壁は4尺5寸高，2尺2寸厚，5丈4尺長，4丈5尺幅。前面の中央には月門を建て，漆塗りの木戸をつけ，門をくぐって屏風の前に石碑（以下）を建て，某親王，某親公，某郡王之寝と刻字する。前には2段構造の拝庭をつくり，それぞれが6尺幅である。囲壁（女牆）の前面の左右は共に1尺8寸高，7寸厚，禁界の周囲がそれぞれ20丈。国公，郡公，位階を与えられた公主の園寝は，臣位の園寝の例則に従う。内壁は3丈6尺高，2丈3尺長，2丈3尺幅，外壁は4尺1寸高，4丈5尺長，3丈6尺幅。“某国公，某郡公，某公主之寝”と刻字した石碑を建てるが，拝庭と女牆はつくらない。禁界の周囲はそれぞれ12丈。未封の皇親や公主の山分は，婕余の例則に従う。内壁は，3尺2寸高，2丈1尺長，3丈2尺幅，外壁は4尺高，3丈6尺長，3丈2尺幅で，石碑には“前朝”，“某前朝皇親”あるいは“前朝公主第幾次之墓”と刻字した石碑を建て，禁界は周囲それぞれ8丈”³¹⁾とされている。

石碑については，1838年より以下のような規定がある。

“各妃の園寝の石碑は，2尺3寸4分高，1尺3寸5分幅，2寸7分厚，最頂高が7寸2分高，1尺8寸長，脚部は5寸4分高，2尺2寸長，総高が3尺6寸。頂部の前面と碑面の周囲，脚部は文様を刻み，某妃嬪の園寝，某族と刻字する”。

宮嬪の園寝，婕余から宮人の山分も，規格，文様，石碑について細かく規定されていた³²⁾。

夭折した皇子や公主の山分は，玉人と同じとされていた。“塲壁は18尺長，16尺幅，2尺7寸5分高，1尺7分厚で，屏風の前に，1尺5寸高，8寸2分幅，2寸5分厚で，脚部が4寸高，1尺4寸長，8寸1分幅の石碑を立てる。斟酌して城郭を建設する方形塲1200個，山石1.5盛り，石灰2500斤，サトウキビの蜜49斤，培紙（giấy bời）350枚，石碑1基を給し，扉を2つ作る。人夫24人によって24日で作り，

29) 阮朝の規定によれば皇帝の妻妾は9つの階級があり，その内の上から2つが妃嬪と宮嬪であり，妃嬪と宮嬪の陵墓だけが園寝と呼ばれる。それ以外のものの墓は単に「墓」と呼ばれている。

30) 山墳・早塲とは成人前に夭逝した皇子，公主の墓であり，通常は合葬されて集合墓を形成する。本来は山墳と呼ばれるべきであるが，現在は早塲陵と呼ばれる。

31) 『欽定大南會典事例續編』工部・45卷40b-41a。

32) フエにおける園寝の数は膨大な数に上るが，それらを記録したものは限られており，ここでは園寝のあらましのものを挙げるに留める。

銭72貫，米19方6鉢を給す。”³³⁾と記録されている。

Ⅲ. 儀式・葬礼

Ⅲ-1. 葬礼

皇帝の葬礼儀式は非常に凝ったものになっており、『欽定大南會典事例』・禮部（124-127卷）の中で明確に規定されている。大まかには、以下のような構成になっている。

1. 皇帝が崩御後，乾成殿で亡骸を安置し，神拍を結ぶ³⁴⁾。祭殿の寝床上で小殮の礼を行う。
2. 祭殿の正寝の東側で大殮の礼を行う。
3. 亡骸を死宮（棺）に納め，皇帝と皇親臣と二品以上の官が，祭殿にて2度哭して伏礼する。
4. 死宮を別の殿に運ぶ。嘉隆帝の場合は，皇仁殿殿，明命帝の場合は慶寧宮，紹治帝の場合は，保定宮に安置された。
5. 成服の礼を行い，葬礼時の服装，葬礼の時間，葬礼期間内の禁避（服装，遊戯歌舞，婚礼などに対して）についての規定が知らしめられる。
6. 金索と香寶（木製の仮の国寶印）をつくり，諡と廟号を贈り，南郊壇，祖廟，社稷壇にて天地へ報告する。
7. 高位の大臣を含む葬礼班を設立し，埋葬日や葬礼の御輿で用いる用具（靈車，龍巡車など）を製作する。
8. 大臣の命令に従い，昼夜，天地，尊廟，社稷壇に埋葬の敬告を行う。官に各陵寝に葬礼が通過することを告げさせる。
9. 啟奠の礼を行う。これは葬礼を始める前の最後の礼である。
10. 龍駕（亡き皇帝の靈柩）を宮から送り出し，船に乗せフオン川を遡る。旗台は白旗を掲げ，9発空砲を撃つ。全ての皇族と官吏が見送り，船が通る所の一般人は，船の方向へ香案を立て，哭して伏礼して見送る。
11. 陵墓に到着すると，墓穴に棺を納める礼を行い，進贈の礼（絹や明器を贈る）を行い，明器を燃やし，棺の蓋を閉じる。郭室を石でつくり，墓穴を埋める（遂道を閉じる）。
12. 陵墓の正殿で，山や后土神への感謝の儀礼，神拍（thần bịch）に提起する礼（徳高望重の官位のものに神主へ提起させる）などを行い，神拍を埋葬する。神主は御駕団と共に宮廷へ連れ帰る（御輿で独立した廟へ案内する）。
13. 官は大臣の命に従い，天地，尊廟，社稷壇へ陵が穏やかになったことを告げる。
14. 親族と各地方は供進の礼を行い，捧げ物を贈る。皇帝と皇族にとって，葬礼の儀式は，さらに27ヶ月続き，官吏や一般人にとっては，これをもって徐々に減っていく。

皇太后や皇后の葬礼も以上の規定と基本的に同じであるが，殮の礼と棺の御輿での担ぎ出しの礼は延壽

33) 『大南會典事例続編』工部・45卷・山分・46b。

34) つまり，白絹で仮の人形をつくり，それによって魄を守る。埋葬後，陵墓で神拍を埋める。



啓定帝の葬送列（1925年）

宮³⁵⁾で行われた。

Ⅲ-2 祭祀

崩御後の皇帝や皇后への祭祀は、朝廷がとても重視していたものである。列廟や各陵寢での祖先祭祀は、大祀に位置づけられており、南郊壇や社稷壇での儀礼と同等である。

陵墓や廟での通年の祭祀は、各皇帝、皇后の忌日、正月の元旦、四季の饗礼、朔日と望日（毎月1日と15日）などに、まとめて行われていた。こうした祭祀は、皇帝が直接執り行うか、大臣の命を受け

35) 延壽宮は、皇城の中で太合にあてられた建物であり、1804年に造営されている。初期には長壽宮、その後、慈壽宮、嘉壽宮と名を換え、最後に延壽宮となった。

た親公が派遣されて行っていた。

IV. 相似と差異

IV-1. ベトナムの他の陵寢との比較

ベトナムの帝王の陵寢史において、阮朝の陵寢は独自の風格を持ち、一つの頂点を極めている。規模建築群としての量、陵域としての景観空間としてそれ以前のものを圧倒している。初期阮朝の帝王陵は数百haの規模をもち、嘉隆陵に至っては2,875haを有し、さらに自然との調和がはかられている。

平面配置や形式において阮朝陵墓は様々な類型をもち、一つのモデルのみに依拠していたわけではなく、個人の性格なども反映し独特なものとなっている。

また東側の都城の各建築群と一定の規格統一性を持ち、フオン川を通じて結ばれている。それ以前のベトナムの陵寢（例：陳朝・黎朝）は、彼らの故郷に造営されており、都城とはかけ離れていた³⁶⁾。

IV-2. 中国の陵寢との比較

一般的に阮朝の陵寢は、中国の明の陵寢の影響を受けている。これは文化政治的に深い理由がある。阮朝は清朝の繁栄期に創始されたにもかかわらず、思想心理的には、彼らは清朝を中国の正統には属さない外族と見做し、明の文化や影響のみを承認していた。それ故、宮殿建築や壇廟・陵寢といったものは、明朝の典礼に従っていたのである³⁷⁾。

陵寢の建築においても、明朝の影響は、陵墓が3つの基本機能（安葬、祭祀と管理）³⁸⁾のための複合体である点に見ることができる。嘉隆帝陵は命名から全体計画まで多くの点で、北京の明代の“十三陵”と類似点が多い³⁹⁾。さらには、明命陵は、呼称から、1つの軸線上に陵寢の2域に分ける配置構成にいたるまで、最も明の陵墓に大きく影響されていると考えられる。しかし、当然ながら、細かいところでは、明命帝陵にも、明樓と葆城を分ける構造や大面積を占める水域の出現のように、独自の点を挙げることができる。

36) 陳朝時代の陵寢は現在の太平省・南定省にある陳氏の故郷——即墨地方（訳者注：ナムディン省ナムディン市郊外の天長府遺跡群。廟はここにあるが、陵墓は現 Quảng Ninh 省の Đông Triều 県 [旧廣寧省東潮縣] などに位置する）に置かれている。黎朝時代の陵寢は、現在のタインホア省にある黎氏発祥の地——藍京に置かれている。

37) 17～18世紀、阮氏が中南部ベトナムに雄拠したとき既に、阮氏は明郷人らの明の遺民を通じて、明朝を尊崇し清朝を認めない思想を受け入れていた。19世紀に阮朝は、鄭懷徳、潘清簡、陳踐成ら明郷出身者を高級官僚に登用している。

38) 楊道明（著）『中華陵墓概論』には、「明孝陵より以後、中国陵墓建築は大きな変化と新しい発展を歩み始めた。明孝陵は宮殿建築に依拠して建設されている。そして、安葬、祭祀と管理という3つの特別な機能という要求を満たすために、陵墓は前院、中院、後院の3つの区域（三院）に分けられる。それは宋代の「上下一体」建築様式に基づき、安葬活動に服務すると同時に祭祀活動に服務する。」とある。

39) 嘉隆帝陵と明十三陵陵墓群はいずれも、その主山を天授山といい、広大な地域にその全一族の配置を計画する。嘉隆帝陵の面積は約28平方キロメートル、明十三陵の面積は約106平方キロメートルである。



嘉隆帝陵域陵墓分布図



明十三陵分布図

V. 結論

阮朝の陵寝は、ユネスコの世界遺産に指定されているフエの宮殿建築群においても、特別な位置を占める建築群である。ベトナムの陵寝の伝統を受けて、阮朝の陵寝建築群は、創造性豊かで、フエの自然条件に合わせて発展している。それ故、フエの陵寝は、独自の風格をもち、完成度も高いのである。

阮朝の陵寝は規模においても、以前のものに比べ大きな発展を遂げ、豪壮な建築群をもつ陵寝区となっている。陵寝の配置の様相は、統一性のなかにも豊かさがみられる。もちろん、晩期になると建築資材などに西洋の影響がみられ、時代の転換期の様子をよく表している。

広く比較すると、フエの陵寝は中国・明代の陵寝の影響を受けつつも、ベトナム独自の創造性も発揮している。フエの陵寝は、その研究の歴史は長いものの、建築、美術、関連する文化などに関し、研究をさらに重ねていく必要がある。特に、儒教文化に影響を受けた周辺諸国との比較が重要である。

主要参考文献

1. Phan Thuận An (1992), *Kiến trúc Cố đô Huế*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế.
2. Phan Thanh Hải (2009), Quy hoạch và kiến trúc kinh thành Huế, *Khảo cổ học*, số 4/2009.
3. Thái Văn Kiểm (1960), *Cố đô Huế*, Nha văn hóa-Bộ Quốc Gia giáo dục, Sài Gòn.
4. Nội Các triều Nguyễn, *Khâm định Đại Nam hội điển sự lệ* 欽定大南會典事例
5. Quốc Sử Quán triều Nguyễn (2004), *Đại Nam thực lục* 大南實錄. Bản dịch của Viện Sử học, Nhà xuất bản Giáo dục, 10 tập.

6. Quốc Sử Quán triều Nguyễn (1909), *Đại Nam nhất thống chí*, 大南一統誌, bản Duy Tân năm thứ 3, bản chữ Hán của Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế.
7. Quốc Sử Quán triều Nguyễn (2003), *Đại Nam liệt truyện* 大南列傳, Bản dịch của Viện Sử học, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế.
8. Quốc Sử Quán triều Nguyễn (1917), 欽定大南會典事例續編, bản in năm Khải Định thứ 2, bản chữ Hán của Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế.
9. Mai Khắc Ứng (1993), *Lăng của hoàng đế Minh Mạng*, Hội Sử học Việt Nam xuất bản.
10. Mai Khắc Ứng (2004), *Khiêm lăng và vua Tự Đức*, Nhà xuất bản Thuận Hóa, Huế.
11. Bulletin des Amis du Vieux Hué (Tập san của những người bạn Cố đô Huế), 1914–1944.
12. 楊道明, 《中華建築陵墓該論》中國建築工業出版社, 北京, 1988.

한국어 초록

후에 (Hue) 응웬 (阮) 조 황족의 능묘에 대하여

환 타인 하이

후에 (Hue) 에서는 광남 (廣南) 응웬 (阮) 씨가 응웬왕조를 세우기 전부터 능묘가 조영 (造營) 되었으며 능묘 조영시 풍수사상이 활용되었음을 알 수 있다.

다만 이 시기 능묘들은 타이손 (西山) 왕조 때 철저히 파괴되었으며 응웬왕조가 성립된 후 초대 황제인 자롱 (嘉隆) 의 치세에 재건되었다.

응웬왕조에서는 독특한 형식의 능묘가 조영되었다. 능묘 조영의 과정은 택지 (擇地), 도면 작성, 관을 안치하는 장소의 선정, 능 내부 시설 및 구역의 확정, 조영, 조영 후 산신 (山神) 및 토신 (土神) 에 대한 제례 등으로 이루어졌다. “陵” 또는 “山陵” 이라는 명칭은 황제와 황후에게만 사용되었다. 『흠정대남회전사례 (欽定大南會典事例)』 에서는 능침에 대한 규정이 상세히 기록되어 있다.

능은 산 위에 만들어졌고 능역은 방형으로서 이중으로 된 벽으로 둘러싸여 있으며 주체부 또한 방형으로 구성되었다. 응웬조의 능묘는 도성 (都城) 의 서쪽 및 서남쪽에 집중적으로 분포되어 있다. 평면구조는 시설물이 세로로 배열되는 형식 (明命帝陵, 啓定帝陵) 과 능묘와 침원 (寢園) 을 나란히 배열한 형식 (嘉隆帝陵, 紹治帝陵), 능묘, 침원, 비림 (碑林) 을 나란히 배열한 형식 (嘉隆帝陵) 으로 구분된다. 능안의 연못 등 물과 관련된 요소도 중요한 위치를 차지한다.

응웬조 능묘의 특징은 자기 고향이 아니라 도성 인근에 조영된 점에 있으며 규모 면에서도 이전 시기보다 대형화하였다. 중국의 능묘와 비교해 볼 때 명나라 능묘건축으로부터 영향을 받은 것으로 보인다. 이는 응웬조가 청나라를 이민족 (異民族) 적 존재로 간주했음을 말해주고 있다.

